

現代韓国語における混成語形成の形態論

辻野, 裕紀
誠信女子大学 : 専任講師

<https://hdl.handle.net/2324/1687767>

出版情報 : 日本語学研究. 29, pp.131-142, 2010-12. 韓国日本語学会
バージョン :
権利関係 :

現代韓国語における混成語形成の形態論

辻野裕紀*

〈要旨〉

本稿の目的は、現代韓国語における〈混成語形成〉(word blend, blending)の原理を形態論的な観点から闡明するところにある。本稿では、とりわけ、 $AB+XY \rightarrow AY$ (e.g. 취직+시집→취집)、 $\alpha+XY \rightarrow \alpha Y$ (e.g. 옥+(네)티즌→옥티즌) というタイプの混成語を研究の俎上に載せ、次の2点を明らかにした (α は原語の前部要素、 β は原語の後部要素) :

(1) 混成語の長さAYは、XYと等しくなるのがデフォルトである。

e.g. 통일+템플스테이→통플스테이

(2) 混成語の結合点は次の通りである (混成語結合点規則) :

① α の第1音節が開音節で β の第1音節が閉音節の場合： α の第1音節の[onset+nucleus]+ β の第1音節のcoda以降

e.g. 코리아+홀리건→콜리건

②その他の場合： α の第1音節+ β の第2音節以降

e.g. 사이버+아르바이트→사르바이트

こうした規則に当てはまらない例外的なものに関しては、意味的な観点などからの説明が考えられる。

また、日本語にも「おっぽ」(お(尾)+しっぽ)などのように、混成語が多く存在するが、日本語の混成語においても、長さがXYと等しくなるのが一般的であり、また、音節内部で分離が生じるという点で、韓国語と共通している。

論文分野：形態論

キーワード：現代韓国語，形態論，混成語形成，混成語の長さ，混成語の結合点，現代日本語

1. はじめに

1.1. 研究目的

本稿の目的は、現代韓国語(以下「韓国語」とする)の〈混成語形成〉(word blend, blending)の原理を形態論的な観点から闡明するところにある。すなわち、韓国語において、混成語がいかにかに形成されるかを、形態論的な視点から分析し、韓国語の混成語形成の特徴を明らかにする。また、先行研究に基づいて現代日本語(以下「日本語」とする)とも対照し、韓国語の混成語形成と日本語のその共通点についても簡略に言及する。

* 誠信女子大学校 専任講師，言語学・韓国語学

1.2. 混成語形成とは

混成語形成とは、派生や複合語形成などと同じく語形成に関する過程であり、smoke+fog→smog、キャベツ+にんじん→キャベジン、のごとく、「2語の一部ずつを結合して新しい語を形成するもの」である¹⁾。混成語は、英国の童話作家 Lewis Carrollが用いた「かばん語」(portmanteau)という呼称でも夙に知られており、韓国語にも、개가+후살이→개살이、거지+비렁이→거렁이などのような混成語が存在することが、허웅(1964:276)などによって指摘されている²⁾。混成語は、共時的な語形成論のみならず、歴史言語学や方言学でも扱われ、이익섭(1986:348)には、言語地理学の立場から、거품+머금→거금のような方言形が挙げられている³⁾。このように、混成語は韓国語にも古くから存在するが⁴⁾、とりわけ多く現れるのは、いわゆる「新造語(新語)」⁵⁾である⁶⁾。例えば、군대스리가という新造語は、군대+분데스리가が合わさってできた混成語である。本稿では、こうした新造語を主な考察対象とする。

混成語形成は「削減的な(subtractive)操作を伴う」という点で、いわゆる複合語短縮(compound clipping)⁷⁾と類似しているが、両者は、形成過程が異なり、截然と峻別しておかなければならない。窪菌晴夫(1995:146)によれば、「複合語短縮が削除操作の前に付加的操作によって2原語を結合する操作を経るのに対し、混成語形成はそのような2段階の操作を経ず、2原語がいきなり削除操作を受ける」という点で両者は異なる。韓国語の例で言えば、例えば、短縮複合語である여친は、여자+친구→【付加操作】→여자친구→【削除操作】→여친という2段階を経て形成されるが、混成語である취집は、취직+시집

- 1) 窪菌晴夫(1995:143)参照。亀井孝他編著(1996:595)は、「混成語」(fusion, amalgam)を「2つ(あるいはそれ以上)の単語をならべ、その音形の一部(多くは、中間部分)を削除してできた単語」と定義し、日本語の例としては、ヤブル+サク→ヤブク、ハラウ+タタク→ハタクを挙げている。また、ibid.は、「混成語では、元の単語ないし形態素の音形の一部が残っているのに対し、「フランス語のà+le(s)→au(x)[o]のように、元の形態素の境界が消失している場合は、融合(仏 amalgame)とよばれることもある」としている。
- 2) なお、허웅(1964)は、혼성ではなく、혼태(混態)という用語を用いている。
- 3) なお、이익섭(1986)は、혼성어ではなく、혼요어(混淆語)という用語を用いている。
- 4) 現代語で日常的に用いている単語のうち、混成語という意識がない単語にも、語源的には混成語であったものも存在する。例えば、넙다는너르다+넙다, 차라리는차히+차하로だと考えられる。김원진(1973:57)参照。
- 5) 문금현(1999:295)によれば、現代韓国語の新語について扱った論考は、남기심(1983)を嚆矢とする。
- 6) なお、新造語における語形成のうち、「混成」は中心的方法というわけではない。장혜연(2007)は、新造語の語形成を「合成」「派生」「混成(blending)」「切断(clipping)」「略語化(acronym)」「代置」「借用」に分類し、計量調査を行っているが、混成は2.34%に過ぎず、最も多いのは41.19%の合成(compounding)である。
- 7) 例えば、마ザーコンプレックス→マザコン、サラダドレッシング→サラダレ。なお、本稿では「複合語」という用語をcompound wordの訳語として、すなわち, 집안, 앞바다, 오가다などのように、2つの単語あるいは語基を直接構成要素としてなり立っている語を複合語と呼んでいるが、韓国の学校文法に基づいた標準的な文法書である남기심・고영근(1985;1993)をはじめ、韓国の多くの論考では、こうしたものを「합성어(合成語)」と呼び、complex wordの訳語として「복합어(複合語)」という用語を用いている。なお、混成語が「単純語」か「合成語」かという議論もしばしば行われるが(e.g.황진영(2009))、双方の性質を併せ持った混成語を二者択一的にどちらか一方に分類しようとする自体、無理があるように思われる。尤も、混成語でなくとも、一般に単語を単純語か合成語かに分類するには困難を伴うことも多い。辻野裕紀(2008:77)では、単純名詞を「複合名詞を除いたすべての名詞」(ここで言う複合名詞には派生名詞も含まれる)と定義したが、これは複合語であることが明らかなの以外(は、共時的に)すべて単純語と見做すという立場であり、こうした立場に立てば、混成語は、相対的には、合成語よりは単純語に近いものと言えるかもしれない。韓国語の語形成、語形成論の詳細については、北村唯司(2007)を参看されたい。

→【削除操作】→취집であり、*취직시집という語形は経ない。これは、実際に*취직시집という単語が存在しないことから明らかである⁸⁾。入力段階の前部要素 α をAB、後部要素 β をXY、出力形(混成語)を γ とすると、上の混成語形成と複合語短縮はおのおの次のごとく定式化しうる。

【混成語形成と複合語短縮】

混成語形成: $AB+XY \rightarrow AY (= \gamma)$

複合語短縮: $AB+XY \rightarrow ABXY \rightarrow AX (= \gamma)$

また、窪菌晴夫(1995:147-148)は、混成語形成と句の縮約の境界も微妙だとし、例えば、motelがmotor+hotelではなく、motorist's hotelという句の縮約である可能性を示唆している。韓国語の場合、日本語と異なり、句や文の縮約によって形成された新造語が非常に多く、これは韓国語の新造語形成の代表的なパターンの1つだと言っているが、こうしたものも混成語とは区別しておかねばならない⁹⁾。

1.3. 本稿が対象とする混成語

本稿では、上で見た취직+시집→취집のタイプ、すなわち $AB+XY \rightarrow AY$ となる混成語形成を考察の対象とする。出力形 γ は、組合せ論的には、AX (토마(토)+피(망)→토마피)、AY (취(직)+(시)집→취집)、BX ((인터)넷+맹(인)→넷맹)、BY ((아)줌마+(신데)렐라→줌마렐라)の4パターンがありうるが、このうち、 $AB+XY \rightarrow AY$ が、韓国語の混成語形成の基本パターンであるからである¹⁰⁾。先行研究によって、このパターンが計量的に最も多いことが指摘されており¹¹⁾、筆者による簡単な走査でも $AB+XY \rightarrow AY$ が最も一般的であることが分かった。そこで、本稿では、このことを考慮して、 $AB+XY \rightarrow AY$ というパターンを中心に分析する。

また、一口に混成語と言っても、言語事実をつぶさに観察すると、語形成論的にさまざまなものが混在していることが分かる。例えば、上で見たように、混成語の定義は、「2語の一部ずつを結合して新しい語を形成するもの」だが、옥+(네)티즌→옥티즌、토(익)+페인→토펬인などのように、出力形 γ が αY 、

8) したがって、황진영(2009)などが混成語として扱っている쌍얼, 폰카, 셀카などといった単語も、本稿では短縮複合語と見做す。쌍얼굴, 폰카메라, 셀프카메라という単語も存在するからである。また、ibid.は, 알바족, 싸이홀릭をそれぞれ아르바이트+족, 싸이월드+홀릭として混成語と見ているが、実際には알바, 싸이という語も頻繁に用いられ、そのまま알바+족, 싸이+홀릭である可能性も高いことから、本稿ではこうした語も混成語とは見ない。

9) 例えば, 놀토 (노는 토요일), 노사모 (노무현을 사랑하는 모임) など。他にも, 넘사벽(넘을 수 없는 사차원의 벽), 엄친아(엄마 친구 아들), 갈비(갈수록 비호감), 단무지(단순, 무식, 지랄), 안습(안구에 습기가 차다), 지못미(지켜주지 못해 미안해), 금사빠(금방 사랑에 빠지게 하는 사람), 미나공(미안해 나 공주야), 손오공(손대지 못할 오리지널 공주병), 제물포(재 때문에 물리 포기했어) など枚挙に遑がなく、これらも言語学の分析の興味深い対象となりうる。

10) この点においても、混成語は、短縮複合語と大きく異なる。短縮複合語は、 $AB+XY \rightarrow ABXY \rightarrow AX$ となるのが一般的である。

11) 황진영(2009:19)によれば、AY (ibid.ではad型と呼んでいる)が、完全混成語(「完全混成語」という概念については後述)全体の72.4%を占めている。なお、 $AB+XY \rightarrow AY$ というパターンが圧倒的に多いのは日本語や英語でも同じである。このような傾向について、임지룡(1997:347-349)は、Aitchison(1994:134)を引きながら、「욕조효과 (浴槽効果, bathtub effect)」という概念で説明している。

あるいはABとなっているものも存在する。定義の「2語の一部ずつ」という部分に厳密に従えば、これらは混成語とは見做しえないものだが、形成過程が混成語と類似しており、本稿では、 $\alpha + XY \rightarrow \alpha Y$ のタイプに限り、研究の俎上に載せる¹²⁾。なお、本稿ではこうしたものを「不完全混成語」と呼び、一方、2つの単語の一部がそれぞれ結合した混成語を全き混成語、すなわち「完全混成語」と呼ぶことにする¹³⁾。

【混成語の下位分類】

①完全混成語…2つの単語の一部がそれぞれ結合して形成された混成語

e.g. 취(漬)+(시)집=취집, 짜(장면)¹⁴⁾+(스)파게티→짜파게티

②不完全混成語…ある単語の一部と、別の単語全体がそれぞれ結合して形成された混成語

e.g. 옥+(네)티즌→옥티즌

さらに、不完全混成語には、次の例のように、 α が拘束形態素であるものも存在し、こうした拘束形態素は「単語」ではないため、定義の「2語」という部分にも反するが、本稿では、こうしたものも考察の対象としておく。

e.g. 순-+(신)데렐라→순데렐라, 식-+(파)파라치→식파라치

これらは、それぞれ*순신데렐라、*식파파라치とは言わないことから、短縮複合語とは区別されるべきものであり、短縮複合語ではなく、混成語に準ずるものと見做さなければならない。

以上のことを整理すると、本稿が対象とする混成語は次のごとくである。

【本稿が対象とする混成語】

①AB+XY→AY

② $\alpha + XY \rightarrow \alpha Y$ (α が拘束形態素であるものも含む)

1.4. 先行研究

韓国語の混成語形成に関する先行研究としては、남풍현(1967)、임지룡(1997)、시정근(2006)、황진영(2009)などを挙げる。紙幅の制約で詳細に論ずることはできないが、重要な点、なかんずく、混成語の定義に関わる部分について主に簡単に概観する。

まず、남풍현(1967)は、中世語(15世紀)における混成語を扱ったもので、날혹즈늑헝다(←날혹다+즈늑헝다)、괴외즈헝다(←괴외헝다+즈헝다)、서늘헝다(←서늘헝다+샤늘헝다)などを例に挙げつつ、混成語の新造を「類推の一種으로 여러 model을 對象으로 한 牽引에 依한 것」、「speaker의 意識 속에 여러 類義가 떠오를 때 생기는 困難을 排除하기 爲한 것」、「感動的인 表現效果를 올리기 爲한 것」などに分けている。これらは、混成語が生じる原因(契機)による分類であり、本稿が闡明せんと

12) AB+ β →A β に関しては、AB+XY→AXに準ずるタイプと見做し、本稿では扱わない。

13) なお、황진영(2009)は、こうしたものを「반혼성어(半混成語)」と呼んでいる。

14) 標準語では장 장면が正しいことになっているが、ここでは実際の発音を重視して、짜장면と表記しておく。

する問題とは異なる。

認知意味論に立つ임지룡(1997)は、 $\alpha(wx) + \beta(yz)$ において、 wz, xy となるもののみを「混成語」とし、 wy, xz となるものについてはそれぞれ「머리합성어」、「꼬리합성어」と称して、混成語とは区別している。しかし、語形成論的には、切り取られる部分の位置が異なるだけであり、 wz, xy と wy, xz を区別して、あえて前者のみを混成語と認める根拠が必ずしも明確ではない。この点において、本稿の混成語の定義と異なる。

サイバー言語の造語法を詳細に扱った시정근(2006)でも混成語について論じられているが、その例として挙げられている팬픽や츄팅などは、本稿の立場からすると、混成語とは認められないものである。何となれば、縮約される前の語形である、팬픽션や즐거운 채팅などといった語(句)も実際に存在するからである。そういったものは、既に述べたように、短縮複合語と見做すべきであり、취직+시집→취직のようなタイプの典型的な混成語とは語形成過程が異なる。無論、中には混成語なのか短縮複合語なのか判断に迷うものもあり、その線引きは容易ではない。むしろそのような曖昧な語例を境界として、混成語と短縮複合語がなだらかに連なっているのが言語事実のありようだと言うべきではあるが¹⁵⁾、少なくとも、明らかな短縮複合語を混成語と混同してはなるまい。

황진영(2009)は、本稿と同様に新造語の中の混成語を詳らかに論じた論考であり学ぶべき点が多いが、最も大きな問題は、語例の中に、英語や日本語でも用いられる混成語が少なからず混在しているという点である。こういったものは、混成語の語形がそのまま韓国語に借用された可能性が非常に高く(つまり韓国語内部で形成された混成語ではない)、韓国語の混成語形成のメカニズムを明らかにする上で、無駄な混乱を齎しかねない¹⁶⁾。その実、これとて、厳密に完全に排除するのは困難を伴う作業ではあるが、本稿では、可能な限りそうしたものを分析対象の埒外とした。

1.5. 言語資料

既に述べたごとく、分析対象は韓国語のいわゆる新造語とし、具体的な資料としては、韓国の국립국어연구원(2000,2001,2002,2003)、국립국어원(2004,2005,2006)、국립국어원편(2007)、김기란・최기호(2009)その他を用いて、上に述べた混成語の定義に従い抽出した混成語全115個について分析を加えた。

2. 分析結果

本章では、上で述べた言語資料の分析結果について述べる。

ところで、混成語形成の形態論的な原理を明らかにするということは、混成語の「長さ」と「結合

15) これは日本語や英語の場合も同様である。窪菌晴夫(1995:147)も指摘するとおり、例えば、カモメールや heliport のような語は途中でそれぞれ、カモメール、helicopter airport という語形を経ている可能性も考えられるし、Chunnel は、実際に Channel Tunnel という複合語形も存在する。

16) 例えば, 브런치などは英語からそのまま借用された混成語, 오타리안などは日本語からそのまま借用された混成語であろう。こうしたものを、韓国語内部で形成された混成語と同列のものとして扱うと、不必要な混乱を来す恐れがある。

点」を闡明するということにはかならない。「長さ」と「結合点」が決まれば、混成語の語形は1つに決定されるからである。以下、「長さ」と「結合点」についてそれぞれ論ずる。

2.1. 長さ (音節数)

まず、長さ (音節数) に関して見る。原語 (source word) の長さ と混成語のその関係を、完全混成語と不完全混成語とに分けてまとめると、次の表1、表2のごとくである¹⁷⁾。

【表1】完全混成語 (AB+XY→AY)

長さ(音節数)	語例	語数(比率)
AB=XY=AY	노무현+마피아→노피아	14個(20.0%)
AB≠XY=AY	코리아+아메리칸→코메리칸	52個(74.3%)
AB=AY≠XY	아파트+오피스텔→아파텔	1個(1.4%)
AB=XY≠AY	하우스+오피스→하우피스	1個(1.4%)
AB≠XY≠AY	콘도미니엄+호텔→콘도텔	2個(2.9%)
計		70個(100.0%)

【表2】不完全混成語 (α +XY→ α Y) ¹⁸⁾

長さ(音節数)	語例	語数(比率)
$\alpha \neq XY = \alpha Y$	밥+스터디→밥터디	29個(64.4%)
$\alpha = XY \neq \alpha Y$	소개+미팅→소개팅	10個(22.2%)
$\alpha \neq XY \neq \alpha Y$	새우+햄버거→새우버거	6個(13.3%)
計		45個(100.0%)

これらの表を見ると、XY=AY、XY= α Yとなるパターンが最も多いことが分かる。つまり、混成語の長さは、原語の後部要素と同じ長さになるパターンが計量的に優勢である。とりわけ、完全混成語の場合、筆者のデータでは、94.3%、すなわち9割以上の混成語が、原語の後部要素と同じ長さとなる。例えば、次のような語例がそうである。

- 리(듬)+(태)권→리권
- 박(카스)+(푹)탄주→박탄주
- 추(미애)+(잔)다르크→추다르크

17) 比率は、小数第2位を四捨五入。品詞に関しては、ほとんどが名詞+名詞だが、짜다+미팅→짜팅のように、ごく一部に用言+名詞という構造のものが含まれる。こうした語例の用言部分の長さ(音節数)は辞書形の長さとした。なお、これらは、用言語幹が名詞と直接結合しているという点で、いわゆる非統辞的合成語(e.g. 먹성, 늦더위)と類似しているが、例えば*짜미팅のように言わないことから、非統辞的合成語とは区別しておかなければならない。

18) 完全混成語と異なり、不完全混成語では、 $\alpha=XY=\alpha Y$ 、 $\alpha=\alpha Y \neq XY$ はありえない。

・통(일)+(텔)플스테이→통플스테이

不完全混成語については、完全混成語ほどは顕著ではないものの、6割以上の混成語が後部要素と同じ長さとなる。そして、 $XY = \alpha Y$ とならないパターン、つまり、 $XY \neq \alpha Y$ の語例を観察すると、次のような興味深い特徴に気付く。すなわち、 $XY \neq \alpha Y$ の語例の多くが、팅¹⁹⁾、텔²⁰⁾、버거²¹⁾のように、Yの部分がある特定の要素になっている。これらは、他の要素に比べ相対的に生産性が高く、事実上、接尾辞化していると見ることも可能である。例えば、고시텔の語形成過程は、고시+호텔→고시텔ではなく、고시+텔→고시텔であり、混成語形成にあつて、텔は호텔という単語の一部として切り取られたのではない。もはや텔自体が単独で形態素の資格を持つようになっているのであり、このように見れば、こうした語を、混成語から除外することもできる。少なくとも、「2語の一部ずつを結合して新しい語を形成するもの」という定義に忠実な、典型的な混成語とは言い難い。このような事実を考慮すると、韓国語の混成語形成において、混成語の長さは、原語の後部要素の長さと同しくなるというのが基本だと言いうる。

**韓国語の混成語形成において、混成語の長さは、
原語の後部要素の長さと同しくなるのがデフォルトである**

2.2. 結合点

次に結合点について見てみよう。ここで言う結合点とは、混成が起こる際に2原語が分離・結合する単語内の位置であり、AとBの境界、XとYの境界を意味する。結論から述べると、次のようなタイプが最も一般的である。

- 사(이버)+(아)르바이트→사르바이트
- 컵(퓨터)+(원)시인→컴시인
- 윤(사마)+(영)겔계수→윤겔계수
- 윤(사마)+(인)플루엔자→윤플루엔자
- 흥(풍)+(싱)가포르→흥가포르

こうした混成語はすべて $\langle \alpha$ の第1音節+ β の第2音節以降 \rangle という構造になっている。しかし、さらに語例を観察すると、次のような混成語の存在に気付く。

- 코리아+홀리건→콜리건
- 매직+엔지니어→맨지니어

19) 노예팅, 소개팅, 사기팅など。

20) 휴게텔, 쪽방텔, 고시텔など。

21) 고래버거, 새우버거など。なお、これは햄버거がもともと1単語(ドイツの地名に由来)であるにもかかわらず、햄を「ハム」と異分析(metanalysis)した結果と見てもよいだろう。日本語においても、逆形成(back formation)的に、「チーズバーガー」、「てりやきバーガー」などといったことばが用いられているし、英語でも同様である。

4. まとめ

以上、韓国語の混成語形成について、形態論的な観点から分析を加えてきた。本稿では、とりわけ、 $AB+XY \rightarrow AY$ 、 $\alpha+XY \rightarrow \alpha Y$ というタイプの混成語を対象とし、次の2点を明らかにした。

- (1) 混成語の長さAYは、XYと等しくなるのがデフォルトである。
- (2) 混成語の結合点は次の通りである(混成語結合点規則):
 - ① α の第1音節が開音節で β の第1音節が閉音節の場合:
 α の第1音節の[onset+nucleus]+ β の第1音節のcoda以降
 - ② その他の場合:
 α の第1音節+ β の第2音節以降

混成語はもともと語数自体が少なく、一般化には困難も伴うが、今後も可能な限り、語例を補強しつつ、言語事実に基づいてさらなる検証を行うつもりである。また、上の規則に当てはまらない例外的なものについての詳細な考察や、本稿では扱わなかった混成語エラーについての分析も行いたい。

【参考文献】

- 김완진(1973) 「국어 어휘 마멸의 연구」 『진단학보』 35 : pp.35-59, 진단학회.
- 남기심(1983) 「새말(新語)의 생성과 사멸」 『한국어문의 제문제』 : pp.192-228, 일지사.
- 남기심·고영근(1985;1993) 『표준국어문법론』, 탑출판사.
- 남풍현(1967) 「15세기 국어의 혼성어(blend)고」 『국어국문학』 34-35 : pp.381-393, 국어국문학회.
- 문금현(1999) 「현대국어 신어(新語)의 유형분류 및 생성원리」 『국어학』 33 : pp.295-325, 국어학회.
- 시정곤(2006) 「사이버 언어의 조어법 연구」 『한국어학』 31 : pp.215-243, 한국어학회.
- 이익섭(1986) 『국어학개설』, 학연사.
- 이토[伊藤英人](1995) 「신경준의 『운해훈민정음』에 대하여」 『국어학』 25 : pp.293-306, 국어학회.
- 임지룡(1997) 『인지의미론』, 탑출판사.
- 장혜연(2007) 「신어의 조어방식과 특성」 한양대학교 석사학위논문.
- 허웅(1964) 『국어음운론』, 정음사.
- 황진영(2009) 「현대국어 혼성어 연구 —단어형성적 측면을 중심으로—」 연세대학교 석사학위논문.
- 龜井孝・河野六郎・千野栄一編著(1996) 『言語学大辞典 第6巻 術語編』, 三省堂.
- 北村唯司(2007) 「造語論からの接近」 『韓国語教育論講座 第1巻』 野間秀樹編著 : pp.675-694, くろしお出版.
- 窪菌晴夫(1995) 『語形成と音韻構造』, くろしお出版.
- 辻野裕紀(2008) 「韓国語大邱方言における名詞のアクセント体系」 『朝鮮学報』 209 : pp.47-84, 朝鮮学会.
- Aitchison, J.(1994) *Words in the Mind: An Introduction to the Mental Lexicon*. Basil Blackwell.

【資料】

- 국립국어연구원(2000) 『2000년 신어』, 국립국어연구원.
국립국어연구원(2001) 『2001년 신어』, 국립국어연구원.
국립국어연구원(2002) 『2002년 신어』, 국립국어연구원.
국립국어연구원(2003) 『2003년 신어』, 국립국어연구원.
국립국어원(2004) 『2004년 신어』, 국립국어원.
국립국어원(2005) 『2005년 신어』, 국립국어원.
국립국어원(2006) 『2006년 신어』, 국립국어원.
국립국어원편(2007) 『2002년 이후 생겨난 새말 사전에 없는 말 신조어』(국립국어원 국어자료총서 2), 태학사.
김기란·최기호(2009) 『대중문화사전』, 현실문화.

〈 요 지 〉

현대한국어에 있어서 혼성어 형성의 형태론

본고의 목적은 현대한국어의 <혼성어형성> (word blend, blending) 의 원리를 형태론적인 관점에서 밝히는 데에 있다. 본고에서는 특히 AB+XY→AY (e.g. 취직+시집→취집), α+XY→αY (e.g. 옥+네티즌→옥티즌) 와 같은 타입의 혼성어를 대상으로 다음의 두 가지 사실을 밝혔다(α는 원어의 전부요소, β는 원어의 후부요소) :

(1) 혼성어의 길이 AY는 XY와 같게 되는 것이 default이다.

e.g. 통일+웹플스테이→통플스테이

(2) 혼성어의 결합점은 다음과 같다 (혼성어 결합점규칙) :

①α의 제1음절이 개음절로 β의 제1음절이 폐음절인 경우 : α의 제1음절의 [onset+nucleus] + β의 제1음절의 coda 이후

e.g. 코리안+홀리건→콜리건

②기타의 경우 : α의 제1음절 + β의 제2음절 이후

e.g. 사이버+아르바이트→사르바이트

이러한 규칙에서 벗어나는 예외적인 단어에 관해서는 의미적인 관점 등에서 설명이 가능하다.

또 일본어에도 「おっぱ」 (お(尾) +しっぱ) 등과 같이 혼성어가 많이 존재하지만 일본어의 혼성어에 있어서도 길이가 XY와 동일한 경우가 일반적이고, 또 음절 내부에서 분리가 생긴다는 점에서 한국어와 유사하다.

논문분야 : 형태론

키 워 드 : 현대한국어, 형태론, 혼성어형성, 혼성어의 길이, 혼성어의 결합점, 현대일본어

■ 쓰지노 유키 (辻野裕紀)

誠信女子大学校 専任講師, 言語学・韓国語学

tsujino@sungshin.ac.kr

■ 投稿日 : 2010년 9월 30일

■ 審査開始 : 2010년 10월 8일

■ 審査完了 : 2010년 11월 20일

■ 掲載確定 : 2010년 11월 27일